

## 戦時下における中本たか子の文学

岡田 孝子

帝京平成大学 現代ライフ学部

### Takako Nakamoto, a Novelist under Wartime

OKADA Takako

Faculty of Modern Life, Teikyo Heisei University

#### Abstract

It has been twenty years passed since Takako Nakamoto, the novelist, who lived a life something like out of a novel, passed away. Although she was the novelist who drew the attention of the masses from the very beginning of her debut, also became the candidate of the Akutagawa Prize, and played an active part as it was at the beginning of Showa era. She was buried and was forgotten as the post-war epok came in spite of her well-recieved public estimation before. After all the light had shined on this forgotten novelist again in recent years. This reevaluation was made of these. The first, her exhibition was made in her home town Yamaguchi Prefecture. Secondly, special section about her was carried by Chugoku News Paper. Third, well-introduced by the exhibition of banned books held by Chiyoda ward library. Fourth, among the oversea researchers of modern Japanese literature, had found her worth assessing, became a reason to have won fame again. Additionally, about 10 years ago, one after another, for a total of four volumes were reprinted from Yumani Shobo publishing company. This very much helped people to be handed and touched by her pre-war literary works. I myself took part in aid description of those volumes, and simultaneously was deeply attracted more towards the rare way of her life in that turbulent Showa era. She came out as a neosensualist's writer. Although she changed to the proletarian writer soon, she was arrested by the Peace Preservation Law and converted in prison. She wrote many works in alignment with a national policy after release from prison. After the war, she followed the way as a writer who tackles an anti-base and an antinuclear movement positively, and acts. She can just call it the writer who has lived with the time. In this paper, what became an axis of Takako Nakamoto's literature is seen, following half the life of hers.

キーワード：生産文学，転向，戦争協力。

#### はじめに

2011年6月、中国新聞が「太平洋戦争開戦70年」の特集を大々的に組んだ。その第3部「表現者たち」

として郷土ゆかりの作家や歌人6人を取り上げている。作家の林芙美子や横山美智子、そして中本たか子も、その一人として3番目に登場<sup>1)</sup>。紙面の4分の1、本文7段を使った大きなスペースである。

その本文の真ん中に「〈生産文学〉銃後を鼓舞」の見出しが目をひく。小見出しは2か所。「逮捕され服役」、次いで「平和運動の道」と付けられている。中本たか子の作家としての歩みを、これらの見出しは実によく表していて、戦時下、そして戦後をどのように過ごしてきたのかが想像できる。

記事の本文は半生を綴った『わが生は苦悩に灼かれて』（白石書店、1973年）の「あとがき」からの引用で始まる。

「わたしは、あの侵略戦争に抗しえなかった自分の罪を、充分みとめます。その頃書いたものは、あとで読みかえすことができないほど、おろかさにみちていました。」

そして、中本たか子の生涯をかいつまんで説明している。紹介しよう。

「山口から上京、プロレタリア作家となるが、逮捕、拷問、服役を経験。転向して戦中も執筆を続けた。」

その執筆した作品群がいわゆる生産文学というジャンルに入れられ、戦後の「おろかさにみちてい」という懺悔のあとがきにつながっていく。生産文学とは国策である生産拡充を目的にし、労働奉仕を促す役割を担って書かれたものである。記事中に特に紹介されている1943（昭和18）年に発表した『新しき情熱』は、まさにそのジャンルに入る作品である。

1943年は、日米開戦以来、戦況は刻々と緊迫の度合いを強め、国家による統制がすでに生活の隅々にまで及んでいた時期だった。出版会においても同様で、作家にとって小説を書き、出版することは相当難しい状況にある、そうした時期に『新しき情熱』は出版されている。プロレタリア作家が、なぜ、国策に沿うような作品を執筆していくことになったのか。そこに至るまでを見ていきたい。

## I. 作家への道

中本たか子は1903（明治36）年11月19日、山口県の響灘に位置する小さな島、豊浦郡角島に生まれた。父親は下士官上がりの元陸軍中尉で、退職後は一時期中学校の体育教師を勤めたこともある、子どもたちにとっては厳格な父親だった。6人兄弟の長女として生まれ、角島で小学校卒業まで過ごしたのち、一家をあげて山口市内に転居する。角島では思うような教育を子供に受けさせられないための転居だった。県立山口

高等女学校を卒業後、検定試験を受けて県内の小学校尋常科の教員となる。数年間、教員として勤務しながら文芸誌に作品を投稿していたが、湧き上がる文学への情熱を抑えられずに、1927（昭和2）年、いわば家出同然、父には告げずに上京する。この上京にさいしては、当時の新感覚派を代表する作家、横光利一の後押しが大きな力となった。

横光が中本に宛てた手紙が残っている。妻の死後、東京を離れて京都に滞在中であること、何もする気が起こらず、手紙もほとんど書かないことなどが認められている。その後で、

「あなたに愛人がおありならその人にすすめて東京へ出るやうになすつて、そして、あなたも東京へ出てゐらつしやればどうです。それでなければ、いつまでたつたつて駄目です。失礼ですが、もし就職とか何とか云ふことをお考へになつてゐられるのでしたら、そんなことはどうにでもなりますから。ほんとのことをきかせて下さい。田舎にゐるのと東京にゐるのとはちがひます。田舎でひとり思ふ存分の読書をするのと、東京にゐて、何も読まずに、人に接して人の云ふことを軽蔑するなり感心するなりしてゐることとは、後者のほうが遥かに勉強になつてゐます。略」

と強く上京を促し、さらに付記には、「これはここ一二月の間に書いたただ一本の手紙です。あなたにだんだん逢ひたくなつて行きます。京都へ遊びにゐらつしやればいいのにとときどき思ひます。」と、一人住まいの淋しさもあってか、微妙な心理が伝わってくるような言葉を添えている<sup>2)</sup>。

翌年4月『創作月刊』に「アポロの葬式」を発表。横光の影響を受けた新感覚派風の作品で、これによって作家への第一歩を踏み出す。以後、『女人芸術』を中心に『新潮』『改造』などに「赤」「恐慌」「臨時休業」などを発表していく。なかでも長谷川時雨の主宰する文芸誌『女人芸術』（昭和4年3月号）掲載の「鈴虫の雌」は新感覚派的な作風と、随所、伏字となった大胆な描写によって注目を浴び、東京朝日新聞紙上で広津和郎から「女の意地悪」をここまで描く女性作家は田村俊子以上と激賞される。

「……中本たか子さんの「鈴虫の雌」を読んでかなりの興味を覚えた。これは恐ろしく強い、執念深い、そして痛快な冷酷味を帯びた作家家と思った。女流作家でこの位「女の意地悪」を思ひ切つて見せている作家は田村とし子女史以後なかつたといつていい。いや、田村さんよりももつとずつと意地悪で、冷酷だと

いつでもいいかも知れない。一種独特の表現のし方——意識的に企ててみるとまで思はれる生硬な熟語の連続が読むのに最初はやゝ窮屈な感じを与えるが、しかし少しなれると、その積み重ねが不思議なグロテスクな味を構成してゐる事が解つてくる……時代のうず巻の中に、自ら飛び込み、その中であえぎながら、一種独特な心熱を底にたたえて、そして冷然と総てを投げ出して、読者に見せているのである。」(1929年3月27日付)

『鈴虫の雌』は、男に捨てられ宿無しになっていた女を助けた貧しい文学青年が、やがてはその女に命まで吸い取られていく様子を描いた作品である。広津和郎は「女の意地悪」と評しているが、私の目には「女の意地悪」というよりも、女の恐さ、冷酷さが際立って見え、背筋が凍るような思いがしてくる。日ごとに豊かな肉体に磨きをかけていく女の一方で、やせ衰えていく青年の有様は、まさに交尾後に衰え一生を終わる鈴虫のオスさながらのようであり、その後の中本たか子の作家としての生涯を考えると、非常に興味深い。

ともかく、新人作家として最高のスタートをきり、1930(昭和5)年には小説集として『恐慌』『朝の無礼』『闘ひ』と3冊が一挙に刊行されている。異例の恵まれた出発だったといえよう。

## プロレタリア文学へ

しかし、時代は急速に左傾化へとテンポを速め、アナボル論争を経てプロレタリア文学が席卷しつつあった。新感覚派の作家と目されていた片岡鉄平をはじめ武田麟太郎、橋本英吉らも方向をかえ、中本たか子もその渦の中に飛び込んでいく。東京の山の手、代々木西原から労働者の町、亀戸のいわゆる“モスリン横丁”と呼ばれる工場街に住居を移し、文学と生活の一致をはかるが、それについて次のように語る。

「この冒険じみた転居をわたしがあえておこなうのは、わたし自身の切ない『生きる』ことについての苦悩をかさねた結果だった。わたしはこの年の春ごろから、もう、これまでの生活にあきたらなくなり、背後から追い立てる力を感じていた。それはまさに、この時代の激浪であった」<sup>3)</sup>

ここで、全協(日本労働組合全国協議会)の指示により東洋モスリンの女工たちと労働組合を組織しようと画策、それなりの手応えを感じる日々を送る。『女人芸術』から出発した作家の平林英子も、一時期、プ

ロレタリア作家同盟に所属し、農村の働く女性たちの姿などを描いた作品をかなり発表している。

この時代について平林英子は、「江東地区に行ったり、農村の文学サークルの人たちと交流会したり、全協の指令に沿って活動していました」と『風に向かった女たち』で語っている。思想的には無職透明で出発した『女人芸術』も、やがてプロレタリア文学一色になっていく。さらに平林は「あのころは世の中全体が左傾の時代で、『女人芸術』もずいぶん変わっていききましたね。長谷川先生はどんな思想の持主でも受け入れる方でしたが、ご自分はそういった思想はなかったと思いますよ。だから『女人芸術』の左傾に対してはたぶん不本意だったでしょうね」<sup>4)</sup>

その頃の『女人芸術』の誌面をみると、創刊当時の女性解放をうたい、文芸的な創作や詩、短歌、エッセイ、時には恋愛座談会や女性欠点摘発座談会、男性訪問など遊びもたっぷり含んだ企画が並ぶ誌面とのあまりの違いに驚かされる。

たとえば、口絵写真にはロシア革命後の働くソビエトの女性たちが多くなり、1931(昭和6)年3月号(第4巻3号)では、世界各国の婦人デーについての紹介が載り、「解放された婦人——ソヴェート婦人と五ヶ年計画」の特集に続いて、中条(宮本)百合子「楽しいソヴェートの子供」をはじめ、「一九三一年のプロ文学観」(木下寛子)、「職場からの叫び」として多くの投書、詩も「錆さすな」「無産婦人デーを聞え」など、相当激しい作品が並んでいる。

その一方で、思想弾圧の嵐は次第に激しさを増し、日本中を覆い尽くそうとはじめていた。すでに1928(昭和3)年3月15日、共産党関係者1568人が一斉検挙され、徳田球一ら483人が治安維持法違反で起訴される。いわゆる3.15事件といわれる大弾圧である。同時期、作家の小林多喜二、徳永直らによる全日本無産者芸術連盟(ナップ)が結成されるが、この5年後、小林多喜二は地下活動中に逮捕され、築地警察署内で虐殺されている。2008年、多喜二の代表作である『蟹工船』が突如売れ出し、その年だけで80万部を売るブームが巻き起こったことは記憶に新しい。久し振りに小林多喜二の名前が多くのメディアに登場したが、近年の派遣やパートなどの不安定な労働の急激な増加、広がるばかりの格差社会への批判、怒りが『蟹工船』ブームに現れたともいえよう。

## 検挙、獄中生活へ

共産党関係者への官憲の弾圧は中本たか子にも容赦

なく襲いかかる。1930(昭和5)年1月、東洋モスリン工場の女工たちへの組合結成オルグ中に検挙され、31日間拘留される。このオルグの体験は「東モス第二工場」として『女人芸術』に6回にわたり連載(1932年1月号～6月号)されたが、同誌の廃刊にともない中断、未完に終わっている。戦後、『モスリン横丁』を出してはいるが、中本自身、力を入れて臨んだ連載であり、当時の生き生きした空気を伝えていた作品だけに、中断は惜しい。

同年7月、共産党シンパとしての活動中に再び逮捕され、翌31年10月まで獄中で過ごすことになる。このとき、中本は共産党幹部の田中清玄、岩尾家貞のいわゆる「ハウスキーパー」役をしており、しかも岩尾とは恋愛関係にあった。岩尾は被差別部落出身で、モスクワの東方共産大学に学び、この4月に帰国したばかりの幹部だった。恋愛相手である岩尾についてさえも、この時期、名前も経歴も知らなかった。それだけに獄中で知らされ、ますます岩尾への思いを深くしていく。

しかしながら、彼女がハウスキーパーをしていたこと、妊娠していたという事実は権力側にとっては格好の反共宣伝となり、スキャンダルとしてマスコミにもとりあげられてしまう。

牧瀬菊枝によれば、ハウスキーパーとは「非法法の共産党活動でアジトを偽装するため外見上、ふつうの家庭の主婦のようにみせかける女党员」<sup>5)</sup> だという。しかし、党员でもない中本が荷わされたハウスキーパー役は生やさしいものではなく、過酷なものだった。全く未知の、おそらく共産党の相当上の幹部らしい青年を、たまたま知人の作家から頼まれて引き受けることになってしまった様子を、『わが生は苦悩に灼かれて』で次のように書いている。

「翌日から、その青年が主人で、わたしが主婦となった。外見上、二人は夫婦をよそおわねばならなかった。何しろ、人目をしのぶ非法うんどうであったから……。

主人となる青年は、朝ははやくどこかへでてゆき、夕方か、ときには夜おそくかえってくるのだった。わたしはそのあいだ、掃除、炊事、洗濯をし、ふろをわかった。ときどきとなりにある大家さんにあそびにいつて、外交と情勢の探索をしなければならなかった。なおその上、この家にかかる経費は、誰からも受けないし、誰も言いださなかったから、全部わたしにかかってきた。

わたしは原稿をかい、金をかせがなければならなかった。これまで深大寺の家を借りていたのも、みんなわたしの支出にかかっていた。先に二、三冊出した小説集の印税をその費用にあてていたが、それもしだいに先細りしてくるのだ。わたしは心身ともにいそがしく、朝は早くおきて家事をやり、夜はおそくまで机に向った。睡眠時間がとてもみじかいので、朝おきたとき、瞼がひらかない。そこで紅茶をまっくろに煎じてのみ、やっと眼がさめていった。」<sup>3)</sup>

それでいて、会議などが行われる際には、屋外の見張りにだされ、彼らの話し合いの場に同席することもなく、「したがって、わたしはその会合の内容など、ぜんぜん知らなかった。」という。

みずからの使命として亀戸に居を移し、主体的に組織づくりに没頭していただに、この従関係の「ハウスキーパー」役は、当然、彼女にとって満足できるものではなかった。しかし、与えられた任務を放棄するわけにはいかない。不満を抱きつつも、ひたすら彼等に尽くすことが、彼女にとってはプロレタリア階級解放への闘いだったといえよう。

中本と同時期、『女人芸術』を執筆舞台にしていたプロレタリア作家の松田解子も、共産党员だった夫たちが家で集まりなどをするとき、アパートのまわりを回ったりしながら見張りをしていたという。

「ハウスキーパー」は非法活動を余儀なくさせられていた共産党にとって、活動をしていく上での格好な手段であった。家を借りるにしても、夫婦であれば疑われない。しかも、家事から連絡役、雑用に至るまで女性がこなし、さらに生活費まで女性が負担する。これほど使い勝手のよい手段も珍しい。男たちの活動を援助し支えるのが女たちの役割で、まさに性別役割分担だった。大衆の、労働者のための革命という錦の御旗を掲げながらも、現実には男社会の論理が支配していた。女を道具として使っていたと批判されても仕方がないだろう。小林多喜二の「党生活者」の笠原はハウスキーパーであり、片岡鉄兵の「愛情の問題」なども、このハウスキーパー問題を扱っている。

## 『婦人公論』で特集

中本たか子の逮捕後、1932年10月30日に起きた「新生共産党事件」<sup>9)</sup> は検挙者678名中女性が106名いたことが判明し、その数の多さはもとより、女性たちの多くが地方の富裕層の出だったことが、社会に衝撃を与えた。これは、熱海で全国代表者会議を開催中、岩



田義道、風間丈吉ら共産党員が検挙され、その後、関係者が多数検挙された事件で、ジャーナリズムは、格好のスクandalとして取り上げ、性を強調した興味本位な記事を掲載する。自分の相手の名前さえしらずに関係をもつ女、次々と相手を代える女たちといった見出しで、「不道德な女」「ふしだらな女」というイメージをつくり上げていく。

そうした中で、『婦人公論』（1933年3月号）では「主義と貞操の問題」として80ページにもわたる特集を組み、平塚らいてう（雷鳥と署名）、野上弥生子、山田わか、窪川（佐多）稲子らが執筆している。

平塚らいてうはこの特集以前、東京朝日新聞（1月21日付）に「女共産党員への抗議」と題して批判を寄せている。「過日『東朝』紙上で、女性共産党員たちが、党の資金調達のために、党資金局の指令をうけて、その性を売った形跡のあるのを、女性としての自覚を欠くものとして抗議したのに対し、多くの識不識の同性の方々から共鳴の言葉を送られたのにはわたくし自身も意外とするほどでした。」

で始まり、女性の性を露骨に利用した共産党への批判を土台にしながらも、犠牲になった女性党員自身の性思想を問題にしている。親や主人のために喜んで身売りした封建の世の女性たちと、彼女たちは変わらない。まさに「男性思想の奴隷」であると、らいてうはいう。

かつて日本のフェミニズムの源流となった『青鞥』を発刊し、『新しい女』として、さんざん世の批判を浴びたらいてうが、今度は革命運動に共鳴して活動家となった女性たちを批判する側にまわる。与謝野晶子や市川房枝、高良トミなど女性運動のリーダーたちが戦時下の国家体制に組み込まれ、協力していく流れの中で、平塚らいてうも例外とはいえなかった。戦後、平和運動の中心的存在として活動を続けた平塚らいてうの戦時下の言動も、たとえ負であろうと評価の中にいれるべきであろう。

窪川稲子が彼女たちを非難するジャーナリズムに対しての批判を向けるのは、プロレタリア作家として思想上からも当然だろう。やがて従軍し、戦争賛美の原稿を書くようになるが、この時期においては女性たちに援護の声をあげている。伏字だらけで判読が困難な誌面だが、平塚らいてうの「女性の自覚」を問題にした先の東京朝日新聞の記事を取り上げて反論する。起訴されたなかに実際に知っている女性がいて、彼女たちが確固とした思想をもった活動であり、ら

いてうの批判はまったく的外れであることなどを述べている。

一方、野上弥生子は若い人たちが同じ信じる道を歩む過程において、恋愛に陥るのはよくあることであり、同志愛が発展するのも自然のことだと温かな視線で擁護している。

なお、このような問題を正面から取り上げた『婦人公論』は、かつては『青鞥』の「新しい女」を特集したりもしてきた。この「主義と貞操の問題」特集も、時代の一步先をいく女性誌のオピニオンリーダーとしての姿勢がみられ、さすがというべきだろう。

## Ⅱ. プロレタリア文学から生産文学へ

1930（昭和5）年7月、田中清玄らとともに家にいるところを急襲され、検挙。府中署に連行される。連日、取り調べ室で数人の屈強な特高から殴る、蹴るの凄惨な拷問を受け、さらに性的な拷問さえ加えられる。まさに生死をさまよう日々を体験する。

「栗田ともう一人の男とが左右から、力いっぱいわたしをなぐり、けるのをしばらくみていた青木は、室の隅から竹刀をもってきて、わたしの頭をたたきつけてきた。わたしは三人の男どもにかこまれ、力のかぎりの暴行をうけて、頬はゆがみ、髪の毛はばりばりと抜け、背中は足蹴をくらいつづけて骨がいたみ、頭は竹刀でたたきつけられて、しだいに意識がくらんでいった。」<sup>3)</sup>

その拷問の様子を中本たか子は『わが生は苦悩に灼かれて』で詳細に記しており、衣服をはぎとられ、後手にゆわえあげられての拷問という信じがたい凄惨な場面が続く。

当時、思想犯として取調べを受けた女性たちの手記を読むと、同様な性的な拷問を受けていたことがわかる。小林多喜二の拷問死を再び言うまでもないが、恐るべき暴力が権力の名の下に行われていたのであり、このことは忘れてはならない。

何日間にも及ぶ拷問に加え、拘留されてはじめて妊娠三カ月にあることが判明。これは、「特高の拷問にもひとしい精神上の責め苦」であり、「愛情の問題が、こんなにも自分を生きた心地もなく責めさいなみ、ひとを傷つけ、組織に泥をぬることになろうなどとは、これまで思ってもみなかった」ことだった。しかも、故郷の両親や妹たち家族が受ける世間からの指弾は並大抵のものではなく、それらを思うにつけ、彼女に

として刑務所での日々は死を考えるほどのつらく苦しいものとなっていった。

やがて、極度のストレスから神経障害を起こしてしまう。市谷刑務所から精神病院に移送、隔離され、ここでも死の直前まで行く体験をする。留置場・精神病院での目をおおう体験は前述のとおり、『わが生は苦悩に灼かれて』に詳しい。その生々しさ、リアルさは言葉を失うほどである。なお、同書は亀戸に転居し、プロレタリア運動に向かう1929年から治安維持法違反により実刑判決を受け服役するまでを辿っている。

### 治安維持法違反で有罪に

1931（昭和6）年10月長谷川時雨と菊池寛が身元引受人となって保釈。菊池寛の世話で中央区木挽町にあった文藝春秋倶楽部にしばらく落ち着くことになる。その後、獄中にいる岩尾から、結婚を望むなら、共産黨員である自分にふさわしい人間になるように、まずは自己を鍛えるために「工場に入って働くこと」を勧められる。そのため、年齢を偽り、川崎にある耐火煉瓦工場に臨時女工として一年近く働く。このときの重労働の女工体験が後の長編小説『耐火煉瓦』となった。しかしここでのオルグは実らず、福岡の街頭での活動中に再検挙され、治安維持法違反に問われる。

折からの佐野学や鍋山貞親の共産党指導者たちをはじめとするなだれをうつような転向の季節の中で、田中清玄も岩尾家定も転向。中本たか子も転向を表明する。共産黨員でなくても、本来ならば執行猶予程度ですむところを4年の判決（恩赦によって3年に減刑）を言い渡される。公判で特高から加えられたすさまじい拷問を告発し、さらに治安維持法批判をしたためだった。裁判長の「本人は口で転向をいうが、本官はそれをみとめることはできない。改悔もみとめない」と断じた裁判長の言葉は、その後の中本たか子自身の主張する「偽装転向」の根拠となる。

広島県の三次刑務所で3年の刑期を過ぎて出獄、翌1937（昭和12）年から作家活動を再開し、精力的に作品を発表していく。

獄中生活に材をとった「白衣作業」（『文芸』1937年9月号に掲載）は作者らしき主人公を中心に、獄中の女性受刑者たちの工場労働を描いた作品で、芥川賞候補になった。受賞はしなかったが、塀の中、それもさまざまな過去を持つ女性受刑者の姿を生き生きと描いていて、評判になり、翌年、単行本化されている。

ほとんど人目にふれることのない刑務所の、しかも女性たちを描いているだけに、当時としては注目に値する作品だったといえよう。

この1938年には、『白衣作業』（六藝社）をはじめ、単行本を3冊出している。実際に岩手に行き、綿密な現地取材をした『南部鉄瓶工』（『新潮』2月号に発表後、竹村書房刊）、書き下ろしの『耐火煉瓦』（竹村書房）。この書き下ろしは川崎の煉瓦工場に一年近く女工として働いた体験をもとにした作品で、完成までに「一年を要した」という。プロレタリア作家としての面が強く出ており、生産文学へと向っていく以降の作品とは一線を画している。中本たか子の代表作といえよう。

あとがきに「今のやうな時代は、言葉の表現が非常にむづかしいのである。私は表現について、大変なやんだ。」とあるが、彼女が文筆活動を再開した1937年は七月に中国への全面侵略戦争が始まり、12月には宮本百合子、戸板潤らに執筆禁止指示があった。プロレタリア文学運動の退潮後、国家による文芸統制は強化されていき、文学にかかわらず映画などの表現活動においても厳しい規制をうけるようになっていく。まして出獄後だけに当然、監視下に置かれていただろうし、彼女が発表する作品はどれも厳しいチェックをされていたことだろう。制約のある中でのギリギリのところでの執筆だったに違いない。

### Ⅲ．生産文学と戦時下

『新しき情熱』は1943（昭和18）年11月に金鈴社より出版された作品である。1931年9月の満州事変によって日中戦争となり、すでに戦時体制に入っていた日本は、1938年には国家総動員法が交付され、勤労動員も始まる。翌年には米穀配給統制法を公布、学生の長髪禁止・パーマメント廃止、灯火管制規則や国民徴用令も公布されて国民の経済・生活は隅々まで国家の統制下におかれる。1941年にはアメリカとの戦争に突入。人々の暮らしは、ますます不自由な度合いを強めていく。

また、戦火の拡大につれ多くの作家たちが「ペン部隊」として各地に派遣され、軍部に取り込まれていく。男性作家はもとより、吉屋信子、林芙美子、佐多稲子たち女性作家たちも同様、中国戦線や遠く南方の戦線まで視察に出かけている。彼女たちが戦地から送る原稿を、銃後の女性たちはどのような思いで読んだ

のだろう。夫や息子、兄弟たちが「お国のため」に命をかけている。その戦場のレポートを読みながら、不自由な生活に耐え、勤労動員にかり出される苦痛もすべて積極的に受け入れていったのではないだろうか。

日ましに戦況は悪化の一途をたどる一方で、国民総決起を促す「撃ちてし止まむ」の戦意高揚ポスターが町中に貼られ、雑誌の表紙を飾るようになる。学徒への軍需生産従事に対する勤労動員命令や25歳未満の女子による勤労挺身隊の動員、工業就業時間制限の廃止にともなう女性や年少者の休日、深夜業への拡大など、戦場に出ていく男たちに代わって女性も積極的に産業戦士としての役割を担わされるようになる。『新しき情熱』はそうしたなかで発表されたのだった。

### 『新しき情熱』

機械工補導所で女子機械工を目指す4人の女性たち、光子、スミ、タエ、アキノ。それぞれ事情をかかえて補導所に通っている。スミは織物工場の女工をしていたが、その工場が軍需産業工場にかわったのに伴い、志願。南方に出征している従兄の丈吉に憧れている。アキノもスミと同様、戦地にいる勇造との結婚を考えている。一方、タエは女給あがりの32歳。9年前に同棲していた河井との間にできた娘を一人で育てているが、自分たちを捨てた河井をいまだに忘れていない。光子は26歳。百貨店に勤めているときに男に騙され、妊娠。乳児を兄夫婦の籍に入れて育ててもらっているものの、一人で生きることの寂しさに苦しんでいる。

そんな女性たちが緊迫していく時代の要請に従って「女子機械工」という職を志すのだが、結局、丈吉は南方で戦死し、勇吉も片足を切断。スミたちは彼らの分まで「たゞ精一杯に働き抜いていく」ことが永遠に変わらぬ愛の証であると確認する。タエは機械工として働いている河井と再会、求めつつも頑なに拒絶するタエに上司は元の鞘におさまることが「本人にとっても、職場にとっても、またお国にとっても急務」なのだという。つまり、二人が安定した関係を保つことにより、仕事をはかどり、増産の命令に沿うことができる、という論理である。そして、光子。彼女は班長の豊崎に永遠の理想の男性像を見出す。長身で引き締まった冷徹な顔、思慮深い双眸。豊崎こそ常に自分を導いてくれる指導者だった。しかし彼も徴用されて南方へ行くことになり、絶望の中から光子は自分の進むべき道を見つけ出す。豊崎にふさわしい人間になるこ

と。彼の「精神をくみ」「理想を生かして」いくことが、彼を愛し、愛されることになる。そのためにまだひたすら働き、「お国のために身も心も投げ出して働き抜く」ことなのだ。

どのページを開けても働くことの喜び、お国の役にたつこと、犠牲を尊いとする表現があふれている。

作業中にけがをしたアキノは「私たちはお国から、おもいつとめを背負はされてゐるのを忘れてはいけないわね。私、こんな傷を作つてお国に全くすまないと思つてゐるわ。あたしが休んでゐる間にお国の力がそれだけ減ることになるものね」

「彼女が旋盤工になって自己を発見し、自己を高めていくのは、祖国をみだし、祖国への愛情を増していくことだつた。それは、自分のさゝやかないとなみが、また自分の微々たる働きが、より大きな意義にたかまつていくことでもあつた。」

このような記述をみれば、この作品を戦時体制への協力を担ったとみなすことは簡単だと思う。「自分の旋盤に向かふことは、兵士が鉄砲をとることであり、自分が職場にあることは、兵士が戦場にあることだ。自分はこゝで、たゞかひに加わつてゐるのだ」という意識は「生産文学」といわれる所以であろうし、「撃ちてし止まむ」を浸透させ、戦場に出てゆく男たちに代わって女の「産業戦士」を作り出す役割を率先して演じたことは否めない。

それにしても、「働く民衆」のために家族や生活すべてを犠牲にして国家と闘い、法廷で特高の拷問に抗議し、治安維持法を批判した作家が、どのような経緯を経て『新しき情熱』にたどり着いたのだろうか。牢獄での3年間の体験は、彼女の文学にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

### 生産文学への転機

出獄してまもなく発表した『白衣作業』は、一言でいえば受刑者たちとのひたすら労働を通した連帯の喜びを描いた作品である。彼女たちの兵士が着る白衣を作り上げる労働が、まさに戦争協力であるにもかかわらず、それに対してのためらいなどはない。『南部鉄瓶工』にしても搾取される労働者への連帯はあるものの、かつての革命への燃える情熱はもはや見出せない。『南部鉄瓶工』の続編である『建設の明暗』（1939年 春陽堂書店）には非常時体制への無批判が確実に見受けられる。しかもそれは弾圧をおそれての迎合とか偽装といったものではなく、中本たか子自身が銃後

のひとりであるべきだと信じ、作品化しているように私には思えてならない。

そんな疑問を抱いてこの間、中本たか子の作品を読み進めていたのだが、1939年に出版された『第一步』（六藝社）は、その疑問を解く作品集といえよう。表題作ははじめ3編が収録されている。

表題作「第一步」の主人公の津知子は30歳を過ぎの独身。役所を退職した父親と郷里である岩手県中部の町で二人で住んでいる。近所の娘たちに裁縫を教えている津知子は共産党事件で検挙され、未決を2年、実刑3年の牢獄生活を送っていた。疲れきって帰郷したものの、兄弟や知人の誰もが彼女と言葉をかわそうとはしなかったが、親戚の五郎だけが獄中でへの転向を知り、温かい言葉をかけてくれたのだ。その五郎や裁縫を習いにきている娘の兄も召集されるのだという。出征兵士を見送る駅頭で、歓送の歌を群集とともに津知子も口ずさむ。

「群集の声が一つになつて天地にとけ合ふのを眼の辺りに見、身を以て感じてゐる今、打つて一団となつた群集の心に触れ合ふものを彼女は感じた。五年の牢獄生活で、夜も昼も思ひ通したのは、日本の働く民衆のことであつた。いろ／＼な考へで社会に出て見ると、一般民衆の方向は、こゝにあつたのだ。 略

戦争へ、戦争へ——と誘発されて行く一般民衆の心は、今、こゝで堅く無言の団結を作つてゐる。津知子はこの人々の中に交つて、嘗ての左翼的な言動が、いかに脆く叩き潰されてゐるかを知つた。一般民衆の方向と自分たちとは、これまで全くすれ違つてゐたのだ。これから、日本の働く民衆を追ひかけなければならない。それは、この生きた現実即して、民衆の動く方向に歩調を合せて、そこから芽生える進歩的要素を、日本の特殊性に応じて導き、発展させなくてはならない。…」<sup>6)</sup>

津知子はもちろん中本たか子自身であるのは間違いない。もちろん、郷里や家族構成などは変えているが、その他はほぼ事実と考えていいだろう。この「第一步」には、その前年に出版した3作とは著者自身の考え方に大きな変化が見られる。ここには、「転向」したということを実際に言葉として表現しているし、戦争へと向かっていく社会の空気に自分を委ねてしまっている。しかも、それが心地よい興奮を伴って描かれている。

今まで信じていたものが、なんとあっけなく中本たか子の中で否定されてしまったのだろう。「戦争へ、戦

争へ」と進んでいく民衆の動きが、なぜ、著者にとっては否定すべきものとは写らなかったのか。

そして、「第一步」では、銃後の女性たちとして、実力者の妻たちを集めた派手な「××婦人会」ではなく「〇〇婦人会」をこの村でも組織することが核となっていく。××婦人会はもちろん愛国婦人会であり、〇〇婦人会は国防婦人会のことである。

## 国防婦人会への傾斜

1932年（昭和7）に大阪で250名で発足した国防婦人会は「国防は台所から」をスローガンに掲げ、かっぱう着にたすきがけの制服で、一般大衆の主婦をはじめ、女子労働者、芸妓にいたるまで誰でも参加できる組織として急速に会員を増やしていく。1年後には10万人、1935年には225万人、1941年には900万人となり、「愛国婦人会」を凌駕するようになる。

愛国婦人会は軍人援護を目的に1901（明治34）年に奥村五百子の提唱によって始められた婦人団体で、皇族を総裁に据え上流婦人を中心にしていた。スローガンも「半襟一かけを節約して軍人援護に」で、半襟を何本も買える階層は庶民とはかけ離れた存在だった。急速に会員数を増やす国防婦人会との間で勢力争いが起こり、そうした摩擦が各地であったという。「第一步」には、愛国婦人会が支配する中で、片すみに追いやられていた農村の女性たちが、次第に銃後運動の担い手になっていく様子が描かれている。

この一般大衆である女性たちの組織化が、実は中本たか子の念願する姿だったと言えるのかもしれない。工場に入り込んでオルグし、組合を作り、団体組織に仕上げることを使命としてきたけれども、その果たしえなかった団結が、国防婦人会によって実現できたのである。そこに、彼女は新しい時代の芽吹きを見出したのだろうか。

牢獄での3年間を経て社会に出てみれば、時代は大きく変わろうとしていた。それまで家の中の世界にとどまり、外界の動きから遮断されて生きていた女性たちが、銃後を担う者として、かつてない役割を担われ始めていた。姑や夫に気兼ねすることなく堂々と「お国のために」労働奉仕にいそむ主婦たち。率先して共同作業をする農家の主婦たち。出獄して彼女たちの姿を見たとき、時代の変わりようを全身で受け止め、その輪に入ることを次なる使命と信じたのではないだろうか。そして、公民権や参政権の必要性を津知子を通して語る。



「この戦争でぞくぞく未亡人が出て来るでせう。それは単に再婚によつて補はれるものだけでなく、独立した生活者として、是非とも男子同等の政治的要求が迫つて来るものです。私はこの戦争が、日本の歴史に、実に複雑な問題をさまへな角度から与へ、それをさまへな角度から開いて行くものと見てゐます。例へば、婦人問題などもその一つです。」<sup>6)</sup>

女性が男性と同等の仕事をし、同等の権利を主張できる社会こそは念願するものだったが、そのためには戦争さえもある部分で肯定的にとらえる。市川房枝や高良トミら女性リーダーたちが陥つたと同様の、戦争翼賛のこの姿勢こそが『新しき情熱』につながっていくことになったのではないだろうか。

なお、『新しき情熱』で光子があこがれる岡崎は岩尾であり、1941（昭和16）年に結婚したプロレタリア文学運動の中心的理論家・蔵原惟人でもあるといえよう。つねに自分より優れた相手、指導者を追い求める傾向が、中本たか子には濃厚であり、その指導者へのあこがれが共産党への信奉となり、国家体制への協力となってあらわれたように思える。

## 終わりに

かつて横光利一は中本たか子作家として最大限に評価した。

「中本君はやれないことをやろうとする。すると人は笑ふ。こまでは作家は芸人と同じことだ。笑はれてゐるより仕様がな。しかし、今に中本君はやれないことまでやれるやうにしてふであらう。その能力は今の仕事の中に見えてゐる。中本君の一番の特長は今までの女流作家が美しいと思つてゐたものを捨てて了ひ、汚いと思ふ所のものをすつかり美しくしようとしたことだ。今の所、人の汚いと思ふ所のものをすつかり美しくはしていない。しかし、美しくしかけてゐる。」（「中本たか子氏について」）<sup>7)</sup>

マルキシズムへの転換は中本たか子において自然な道筋だとも横光は言う。たしかに初期の作品から、描く世界はたいがい貧しい労働者階級であり、資本家に対しては容赦ない批判をもって描いている。けれども、戦時下の1936年以降の作品については、庶民を描くにしても、そこに労働をする喜び、生産に従事することが生き甲斐であり、それがテーマになってしまった作品が多い。横光が評した「汚い所を美しく描く」特長は、そこにはもはやない。

戦後、『滑走路』（1957・昭和32年）『とべ・千羽鶴』（1988・昭和63年）などを著し、1991（平成3）年に88歳で生涯を終えたが、ひたすら反核・反基地運動に打ち込んだ。

「この戦時中の自分のあやまりを正すためにこそ、戦後は平和運動につくそうと、わたしは覚悟しました。――略―― こうした戦後のわたしの行動を、ながながと述べたのは、戦後のわたしの変革がどのようになされていったかを、しめすためです。しかもまだ、わたしには、十分に自己変革ができていたとは言えません。まだ、まだ、多くの矛盾やあやまりがあります。それを、これから少しでも、自己変革してゆくところに、またあらたな生きがいが生じてきます。すでに、わたし自身は、人生の夕ぐれにさしかかっていますけれど……」（『わが生は苦悩に灼かれて』あとがきより）

戦後、「基地の女」など、かつての「鈴虫の雌」を髣髴させるような作品を執筆したものの、晩年になるほどに平和運動へと向かっていった。共産党に入党、蔵原惟人の妻としての立場なども、当然、影響しているだろう。それとともに、常にひたむきに社会と向き合う資質が、戦後の生き方にも如実に現れているといえるのではないだろうか。

戦後66年がたち、その時代を生きた人々も数少なくなってきた。なぜ、今になってあの戦時下の負の仕事を掘り起こすのか、と問う人もいるかもしれない。しかし、歴史は常に繰り返され、戦前は戦後へと連綿とつながっている。現代の政治・社会状況一つとってみても、その根は戦前に見ることができるだろう。

尾崎秀樹は『魯迅との対話』で次のように記している。

「昭和十六年以降の年表を一覧してみよう。十六年十二月、文学者愛国大会開催。十七年五月、日本文学報告会創立。七月、全国新聞社の整理統合案発表。十一月、大東亜文学者大会。十八年三月、大日本言論報告会創立、日本出版会創立。八月、大東亜文学者決戦会議、十一月、大東亜会議。十九年七月、中央公論、改造両社解散。十一月、大日本言論報告会、国民決戦綱領を決定、と決戦体制に向って足がためされて行く様相は、息づまるばかりである。この悪夢のような四年間について語ることは「気がめいる」という人もいる。しかし、そこをさけて通ることは昭和の文学を語る場合許されない。問題をその点につめて考えることが、再びこの醜をくりかえさないためにも必要なのだ。昭和の文学史は決戦体制下の政治と文学の間

題に冷徹したメスを入れない限り、いつまでも片手落の感がついて廻るだろう。」<sup>8)</sup>

近年、海外でも日本の女性作家が論じられるようになってきた。2011年7月にはシドニー大学で「女人芸術」の作家たちを取り上げてのシンポジウムが開催された。基調講演を務めた文芸評論家の尾形明子は『現代女性文化研究所ニュース』でシンポジウムの様子を報告しているが、「女人芸術」の作家の中で注目を集めた一人が中本たか子だった。彼女の時代を体現した生き方は明快であり、戦後の反基地運動や平和運動への取組みが特に評価されているのだという<sup>9)</sup>。

そうした世界の動きも視野に入れ、また中本たか子の負の部分も合わせてさらに再評価への試みをしていきたいと思う。文学という枠にとどまることなく、戦前の歴史を検証するうえでも、中本たか子研究を進めていくことは意義があるのではないだろうか。

## 引用文献

- 1) 『中国新聞』2011年6月21日付朝刊.
- 2) 企画展示『中本たか子の文学世界』山口県立大学文化創造学科地域実習班（日本近代文学研究室 加藤禎行）山口 2010年10月, pp.1-2.
- 3) 中本たか子(1973):『わが生は苦悩に灼かれて』白石書店, 東京.
- 4) 岡田孝子(2001):『風に向かった女たち』沖積舎, 東京.
- 5) 牧瀬菊枝(1976):『ひたむきの女たち』朝日新書, 東京.
- 6) 中本たか子, (1939):『第一步』
- 7) 横光利一全集, 第14巻, 河出書房新社.
- 8) 尾崎秀樹(1962):『魯迅との対話』南北社, 東京.
- 9) 尾形明子(2011):「世界に広がった『女人芸術』シドニー大学でシンポジウム」『現代女性文化研究所ニュース』30号.